

平成25年度授業づくり拠点校（中学校国語）実践事例

I 公開授業指導案

第1学年 国語科学習指導案

指導者 金子 聡

1 単元 筆者の工夫を読む「流氷と私たちの暮らし」（光村図書）

2 単元構成の意図

- (1) 本学級の生徒は概ね明るく活発で、日頃の授業では課題に対して集中して取り組む姿も見られる。しかし、自由に表現できる場面になると、男子の中には十分な思考を経ずにそのときの感覚や感情で自らを表現する生徒がいたり、女子に小グループ化の傾向が見られたりするため、意見の交流機会を通して他者の考えを受け入れる経験が今後も必要である。

説明的文章の学習について、生徒の75%は新たな知識やものの見方が経験できるために「好きだ」と答えている。中学校入学後の学習としては、内容を理解するために段落を要約すること、文章の展開・構成や図表が与える効果について考えることなどを経験している。また、本教材一読後の感想では、生徒の90%以上がおもしろいと感じており、大まかには筆者の主張、主張を支える根拠となる流氷の役割や地球上で起こっている異変をとらえられていることがわかった。

しかし、今年度実施された「学力定着状況確認問題」の結果を見ると、「読むこと」に関する観点で県平均に達しておらず、文章の内容を正確に把握する力に課題があり、継続した指導が必要であることが読みとれた。中でも本単元に関わっては「ア 文脈に即した接続詞を選ぶ」や「イ 読みとった情報を的確に表現する」、「比喩表現を正しく理解している」設問の正答率は低いものであった。このことから、説明的文章の内容を正確に理解したり、筆者の工夫を読み取ったりすることに難しさを感じている生徒が多いと考えられる。

- (2) 本教材は、筆者の長年にわたる研究から、流氷が地球環境を整えるのに重要な役割を果たし、流氷の減少による影響が、地球温暖化や気候変動による災害、生物の減少・絶滅危機、人間の生活にまで及ぶ危険性があるという警鐘を鳴らす内容である。その中で筆者は、流氷が大気や海洋の循環の原動力となり、気候の調整・海中環境の肥沃化・人間の食料資源に大きな役割を果たしていることを述べている。

また、表現の工夫として「まず」「次に」「このように」など、段落の関係や文章の展開をとらえやすくする語句を使用している。さらに、私たちの生活に身近な「ジュースを凍らせた例」を挙げたり、「太陽光の反射板」「海のふた」「地球のエアコン」という実感として理解しやすい比喩表現を使用したりすることによって、読者である中学1年生に伝えようとしていると考えられる。

これに加えて、研究から分かったことの文末への「……なのだ」「……なのである」の多用や、流氷の役割を述べている文章前半部での接続詞の多用からは、研究者としての熱意や実直さまでもがうかがえる。その反面、結論部分の表現には「原因の一つと考えられている」「かもしれない」「なるだろう」が使われている。このことから、研究からは断言できないことや未来のことに関しては謙虚な研究者の姿や、読者に対して配慮している筆者の内面まで読み取れる教材である。

- (3) 本単元は、生徒の実態に鑑みて「C読むこと」の指導事項の中でも、主として以下のものに焦点を当て、説明的な文章に見られる筆者の工夫（文章の構成や比喩表現）をとらえることで、文章を正確に読み、自分の読みや考えを表現することを言語活動の中心に据える。

- ア 文脈の中における語句の意味を的確にとらえ、理解すること。
エ 文章の構成や展開、表現の特徴について自分の考えをもつこと。
オ 文章に表れているものの見方や考え方とらえ、自分のものの見方や考え方を広げること。

第2次では、「太陽光の反射板」「海のふた」「地球のエアコン」というイメージしやすい比喩表現を使って流氷の役割を述べていることから、比喩表現の効果や、それを用いている筆者の工夫について考えることができるようにしたい。

さらにそれを受けて、文章後半部に出てくる、オホーツク海を「高感度の温度センサー」と比喩表現している部分に焦点をあてていきたい。

まず、オホーツク海沿岸の気温が百年余りで約1℃（たった1℃）上昇していることに伴って、流氷の面積が半減していること、流氷が到来せずに冬でも海の色が青色であることで異常を判断できることなどに着目するよう促すことで、「オホーツク海は高感度の温度センサーなのである」と表現している筆者の工夫について考えることができるようにしたい。

次に前時の比喩表現とは違い、「温度センサー」はイメージしやすいとは言い難い表現であることから、NHKラジオ深夜便「明日へのことば」（2011年12月31日放送）の中で、筆者が表現している「体温計」と比較するよう促すことにより、筆者の主張する危機感を伝えようとした表現であるということをとらえることができるようにしたい。

私たちの身近にある「体温計」は、人間の体温として考えられる範囲の温度を測定できるようにつくられているため、平熱でも測定できるものである。それでは、筆者の伝えたい危機感を十分に表現できないと判断し、「温度センサー」の表現に至ったであろう筆者の思いに迫るために「体温計」よりも警戒感や監視する意味合いが増す「センサー」という言葉のもつ効果をとらえさせたい。

3 単元目標

- 本文の内容・展開・構成を正しく理解できる。
- 比喩表現を理解し、筆者の工夫・意図を自分の言葉で表現することができる。

4 指導計画（全6時間）

- 第1次 結論をとらえ、そこに至る根拠を読み取ることを通して、文章の展開・構成について考えをもつことができる。（3時間）
- 第2次 比喩表現を読み、筆者の工夫や意図を理解することができる。（2時間・・・本時2／2）
- 第3次 文末表現の特徴から、筆者の人柄に触れ、筆者に対する自分の考えを表現することができる。（1時間）

5 本時案

(1) 主眼 ・オホーツク海を比喩表現した「センサー」と「体温計」を比較することで、言葉のもつ効果をとらえ、筆者の工夫を説明することができる。

(2) 準備 ワークシート

(3) 学習の展開

学習活動・学習内容	指導上の留意点
<p>1 前時の学習を振り返り、本時の学習課題を知る。</p> <p>2 本文の後半部分 (P. 164 L17～最後) を読む。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・慣れない雰囲気緊張している生徒がいることが予想されるため、生徒が安心感をもてる雰囲気作りをする。 ・前時の「読者の理解を助けるために比喩表現を用いている」という生徒の考えを取り上げ、本時の学習課題を提示する。 ・全員に声を届けるよう助言することで、声の大きさを意識しながら音読することができるようにする。
<p>筆者はオホーツク海のどのようなところから高感度の温度センサーと言ったのだろう。</p>	
<p>3 比喩表現の内容をとらえる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「高感度」にあたる叙述に着目し線を引くように促すことで、平均気温1℃の上昇で流水面積が半減していることをとらえることができるようにする。 ・「温度センサー」については、正常時・異常時を「白」「青」という言葉を使ってワークシートに書くことで、理解ができているかどうかを把握する。
<p>「体温計」と比較して「温度センサー」の表現では、どのような効果が増すだろう。</p>	
<p>4 比喩表現に込められた筆者の工夫を考える。</p> <p>5 学習を振り返る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・オホーツク海を「体温計」とも表現している筆者が、本文では「温度センサー」と言い換えている理由を考え、説明するよう促すことで、筆者の危機感を伝えようという意図に気づくことができるようにする。 ・本時の学習で新たにもった考えや、級友の発言で印象に残ったものを書くよう促すことで、筆者が意図をもって比喩表現を用いていることに気づくとともに、仲間とともに読み深める学びの良さを感じることができるようにする。

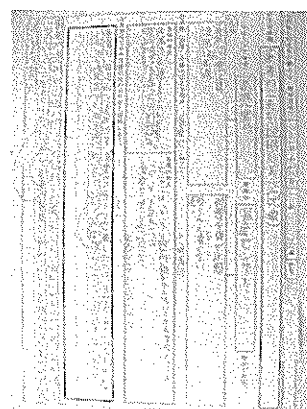
II 研究協議の概要及び考察

1 生徒の学びをつなぎ、広げ、深める

- ・前時の学習の振り返りを全員分まとめて授業の導入時に配布し、学習意欲の向上が図られた。また、文章で表現させる振り返りの方法は、書く力をつけていくことになる。
- ・課題、指示が明確化されており、生徒が思考しやすいものであった。
- ・級友との確認や教え合う場面が設定されており、生徒が安心感をもち、仲間と学ぶ価値が実感できる。
- ・比喩の内容をとらえる場面では、身近な例を挙げ生徒の思考を広げ深める教師の言葉があった。
- ・説明的文章の表現から生徒がイメージを広げ、筆者の意図に迫る授業であった。
- ・ワークシートに自分の考えと級友の考え、説明が記入できる欄があり、構造化されたものであった。

2 課題・改善点

- ・説明的文章の指導計画として適切であったか。
- ・教師のねらいと生徒の力に差があったのではないか。
- ・表現されている内容をつかむ上で、要約力が必要ではないか。
- ・生徒の実態と発問内容が適切であったか。
- ・生徒の思考時間の確保は、十分であったか。
- ・学習の中心の時間を十分に取るべきであった。
- ・生徒が意見交換をする際に、人間関係の固定化を防ぐ工夫が必要である。
- ・読みを深める手だてとして、理由を述べさせることや文章を複数回読ませることも必要である。



3 考察

本教材では比喩表現を読み取ることで文章の内容をとらえ、筆者の表現意図、人柄にまでも迫れると考えて授業構想を立てたが、本文の内容を細かく読めていない生徒には、着目させたい表現や思考を広げ深めさせる発問が難しいものであったことが分かった。「オホーツク海は高感度の地球の温度センサーなのである。」という比喩表現の「高感度」といえる「百年余りの間で気温は約一度上昇し、流水面積は半分近くに減少している」という部分に生徒が気付くためには、「オホーツク海の感度の良さが、具体的に書かれている部分」という教師の言葉があれば、良かったのではないかと思っただ。また、筆者が「体温計」という言葉を使わずに「温度センサー」とした意図を考える発問は、「筆者はなぜ『体温計』を使わず、『温度センサー』としたのだろう。」とすると、生徒は表現を比較しながら「センサー」と「警告」との表現の関連に気付いたのではないかと考えられる。

このことから、生徒に分かりやすい発問を工夫することで、本時の課題の主なものは解決できたのではないかと感じられた。

さらに、活用する力を高めるため、生徒がかかわり合う方法、音声での表現などにも継続して改善に取り組んでいきたい。

Ⅲ 成果

1 読む力の向上のために

3年生において、TTの授業ではT1とT2で、授業前に打ち合わせをして、『教材の研究・分析』『発問の工夫』『ワークシートの構成』『身につけさせたい力』の向上を図った。その結果、「やまぐち学習支援プログラム」の1学期末評価問題では、読む能力において県平均よりマイナス14ポイントであったものが、2学期末評価問題においては、プラス1ポイントになった。

2 書く力の向上のために

3年生では学習後に必ず、説明的文章においては筆者の主張と自分の考えを、文学的文章においては詩や文章から学んだこと、考えたことを60字以上の文章で表現する学習を取り入れた。5月に比べ、12月はクラスのほとんどの生徒が自分の考えを記述できるようになった。

また、文章の書き方や、原稿用紙の正しい使い方について、個別の支援を行った。全く書けない生徒が見られなくなり、原稿用紙は全員が正しく使えるようになった。あわせて話し言葉と書き言葉の違いに留意させ、書き言葉で綴ることができるようになった。

3 音声言語での表現力向上のために

生徒全員に考えをもたせるため、各自の考えを書いてから発表するようにしている。そして、発表をするときに必ずその理由をはっきりと付け加えるように指導した。さらに、他の生徒に補足説明をさせたり、反対の意見を理由をつけて発表させるなど生徒同士の意見・発表にかかわりや深まりをもたせるようにしている。

Ⅳ 学校全体での取組、他教科への広がり

1 「学習目標」の提示（ホワイトボードの活用等）

生徒自身が、1時間の授業においてどのように変容することが目標なのかということを確認し、学習の見通しをもてるようにする。

2 学習の振り返りの実施

1時間の授業における自身の変容を確認するとともに、級友から学んだこと、ともに学ぶ価値を見いだせるようにすることで、学習意欲の向上を図る。さらに、この振り返りをもとに次時の学習へつながりをもたせたり、これを授業改善に生かしたりする。

	年 名前 []			
	←はい			いいえ→
◎授業のめあてが達成できた。	4	3	2	1
◎話し合いに積極的に参加した。	4	3	2	1
◎新たに学んだこと、友達の発言で印象に残ったものなどを書いてみよう。				
[]

3 「発表、聞き方3カ条」の確認・徹底（教師の意識強化）

他者（教師・生徒）の発言をきちんと受け止め、自らが発言・発表する時には、きちんと「声・内容・理由根拠・思い」を届ける（受け止めてもらえる）という意識をもたせる。

4 言語活動の活性化・見える化……「かかわりあい」

「氏名札」を活用し、自分の考えが全体の中でどの位置にあるのか、意見の相違はあるのかを明確にするとともに、異なる意見の理由・根拠は何なのかを知りたいという意欲を高め、言語活動を活性化する。また、自分とは異なる意見や根拠を知ることによって、自らの考えの妥当性、変化や修正点を発見、確認する。